

## 十八道の研究

山 口 真 司

### 序

十八道とは、十八種の印明より組み立てられた行法次第である。三宝院流憲深方（以下幸心流という）では、四度加行を修する場合、十八道・金剛界・胎藏界・護摩の四行法を修するのである。そこで、その四行法の中の十八道について、いささか考究を試みようと思う。

十八道立次第の本拠は、「十八契印」<sup>(1)</sup>である。これは、頬瑜の「十八道口決」に

問。十八道儀軌誰人作乎 答。御口云。大師受<sub>ニ</sub>惠果口決<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>之給也。仁和寺惠什阿闍梨。伝天台長寿坊<sub>ニ</sub>薬<sub>ニ</sub>仁<sub>ニ</sub>或<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>。口說云。慈覺大師此儀軌。弘法大師奉<sub>ニ</sub>伝受<sub>ニ</sub>時。慈覺大師尋<sub>ニ</sub>此軌本説<sub>ニ</sub>給時。大師答云。此我記<sub>ニ</sub>惠果口決<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>。とある様に、弘法大師が惠果和尚の口説に基き「觀自在菩薩如意輪瑜<sub>ニ</sub>伽<sup>(3)</sup>」ならびに「觀自在菩薩如意輪念誦儀軌<sup>(4)</sup>」に於ける十八道の要文を抜萃したものである。そしてさらに、大師は、「無量壽如來觀行供養儀軌<sup>(5)</sup>」等に基き供養と念誦を合一する次第、即ち、「十八道念誦次第」を作られた<sup>(6)</sup>。しかし、「十八道念論次第」には、何点か不明な点が見うけられるのである。大通寺所蔵「十八念誦次第」奥書には、

首云<sub>ニ</sub>先淨三業。次無<sub>ニ</sub>五悔文并闕伽明吒字、又<sub>ニ</sub>以朱示<sub>ニ</sub>三箇口伝<sub>ニ</sub>。謂四攝并二本尊加持也。回向尾句<sub>ニ</sub>回向大菩提<sub>ニ</sub>也。

とある。つまり、弘法大師御作の原本、「十八道念誦次第」の特色は、次第の首めに先淨三業と書き出し、五悔の文はなく、闘伽の明に「吒」の字なく、朱書を以って四撰と一本尊加持の文を示し、回向の尾りの句を「回向大菩提」というと説くのである。

事実、弘法大師全集収録の「十八道念誦次第」には、五悔とあるにもかかわらず実際には、五悔の文は挙げられていない。又、表白神分についても、

表白・神分用否任意<sup>(8)</sup>

とあり同様な事がいえるのである。それらの事について同じく大通寺所蔵「十八道念誦次第」奥書には、

依<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>。寛平法皇自添<sup>ニ</sup>入<sup>フ</sup>五悔等<sup>(9)</sup>

とあり、又、

法<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>製<sup>ニ</sup>、加<sup>ニ</sup>對<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>吒<sup>ニ</sup>二字<sup>ニ</sup>。有<sup>ニ</sup>五悔文及闘伽言吒字<sup>ニ</sup>。又以<sup>ニ</sup>朱示<sup>ニ</sup>四撰并一本尊加持之處<sup>ニ</sup>。回向尾句云<sup>ニ</sup>回向無上大菩提<sup>(10)</sup>。

とあり、寛平法皇が御作次第に五悔等を増補したと云うのである。そして、表白、神分については、

宥快和会<sup>ニ</sup>本加<sup>ニ</sup>表白<sup>ニ</sup>・神分<sup>ニ</sup>。

として、宥快・によって御作次第に表白・神分が加えられたとある。これらは、まことに注目すべき点である。何故、寛平法皇・宥快等は、表白・神分・五悔等を加筆したのであろうか、十八道次第の典拠とされる儀軌等を見ながら考察を進めて行きたいと思う。

## 一

まず、十八道の構成については、興教大師の「諸流通用口決」に

道云六法十八義含十八此六法中コワケト見タリ、六法者、

○一莊嚴行者法、此中五、<sup>アリ</sup> 一者淨三業、二者仏部、三者蓮華部、四者金剛部、五者被甲護身、凡秘密門入思先身キヨメテ仏法基ウス也

○二、結界法此中二、<sup>アリ</sup> 一者地界、二金剛牆、身既調淨ヌレハ、世界不淨仏法修行地、成スヘキ故此法、<sup>アリ</sup>

○三、莊嚴道場法、此中二、<sup>アリ</sup> 一道場觀、一大虛空藏、世界淨ヌレハ本尊道場マウクヘキ故次此法、<sup>アリ</sup>

○四、勸請法此中三、<sup>アリ</sup> 一送車輶<sup>アリ</sup>、請車輶、三迎請、道場マウケヌレハ本尊請奉<sup>ルシ</sup>故此法、<sup>アリ</sup>

○五、結護法此中三、<sup>アリ</sup> 一降三世、二金剛網<sup>アリ</sup>、三火院、諸魔緣内外障<sup>アリ</sup>ナセハ此障除<sup>シカム</sup>為此法、<sup>アリ</sup>

○六、供養法、此中三、<sup>アリ</sup> 一闍迦、二華座、三普供養、事理殊勝、妙供本尊供養スルヲ供養法、云、六法十八義是<sup>ナリ</sup><sup>(1)</sup>

と説く。又、定深の「十八契印義釈生起」には、

行儀有六法。含十八儀。六法者。一者莊嚴行者法有五。一淨三業。二仏部。三蓮花部。四金剛部。五護身。二者結界法有二。一地結。二金剛牆也。三者莊嚴道場法有二。一道場觀。二虛空藏普通供養。四者勸請法有三。一送車輶。二請車輶。三奉請。五者結護法有三。一當部明王印明。二金剛網。三火院。六者供養法有三。一闍迦。二花座。是二供養別供養也。別奉本尊。三普供養。是總供養也。<sup>(13)</sup>

とあり、十八道を整理して、六法十八義をあげているのである。これらは、大賓を招いて饗應する組み立てとなつてゐる。即ち、第一莊嚴行者法に、淨三業・仏部三昧耶・蓮華部三昧耶・金剛部三昧耶・被甲護身の五つを挙げる。主

人自らの三業を淨める為に淨三業を、次で仏部三昧耶にて身業を、蓮華部三昧耶は語業を、金剛部三昧耶に於て意業をそれぞれ淨めるのである。被甲護身は一切衆生を利益せんが為に、大悲の甲冑を被て魔軍を降伏することである。これらによつて主人自らの身仕度が終る。

第二に結界法として、地結・四方結を擧げる。この二種によつて前結界をなす。即ち、地結によつて四方に概を立て、四方結によつて概を基点として、柵をめぐらす。

さらに、第三莊嚴道場法の二種中、道場觀にて結界の中に正しく座敷をもうけ、虛空藏の印言によつて作られた座敷を莊嚴するのである。この結界法・莊嚴道場法に於て、迎客の準備がなされたのである。次に正しく客を迎えるのであるが、それが第四勸請法に擧げる送車輶・請車輶・迎請の三種印言である。つまり、客を迎える為に車を送るのが送車輶であり、その車に客を乗せ道場の空中まで、おつれするのが請車輶である。そして、正しく賓客たる本尊を室中に招き入るのが迎請の印言である。

賓客たる本尊が道場にお入りになつたのであるから道場を護らなければならぬ。道場を護る為に第五結護法の部主結界・金剛網・火院の三種を結ぶのである。即ち、部主結界に於ては道場の警護の門番を、金剛網に於ては、空中よりの魔車の襲来を防ぐ為に、そして、柵を潜る魔障に備える為に火炎を燃すのが火院の印言なのである。

そして、道場が整えられ、その道場にお入りになつた賓客たる本尊並に道場が護られているわけであるから、その賓客たる本尊を持て成す為に第六供養法の閻伽・華座・普供養の三種印言を結ぶのである。沐浴せしめんが為に閻伽の供養をし、そして美しき座にお坐り頂く為に華座の印言を結ぶのである。さらに賓客に音楽（振鈴）や、華環（華鬘）・名香（焼香）・山海の珍味（飲食）・華燭（燈明）讚頌等・賓客に対するすべての持て成しの供養が普供養なのである。

この様に興教大師・定深等は、十八道を「身五、界一、道場一、請三、結三、供養三」の六法十八義に整理しているのである。

しかし、これを「十八道頸次第」<sup>(14)</sup>「梵字十八道」についてみると、如來拳印と普礼を加えて十九種印明を数えている。大師御作の「十八道念誦次第」（以下「御作次第」という）に於ても、やはり同様な事が云える。又、これを「十八契印」についてみると逆に如來拳印を説かずに（道場觀の觀法の原形の様なものはみうけられる）印明は十七種である。これらのことから一つの問題として印明の数に於ても差がある事が窺える。

それでは、幸心流ではどの様な立場を取るかといえば、「十八契印」の十七印明に本尊の根本印を加えて十八印契とする説を取る。これは、頼瑜の「十八道口決」に、

問。十八道各示三何義乎答。御口云。有三十八契印故也。十八道儀軌中。說三十七印言。隨在三何尊。具三本尊印言。成三十八也文。<sup>(15)</sup>

とあり、憲深の「教舜抄」にも同様な事が説かれている。これらによつて、当流では、「身五・界一・道場一・請三・結三・供養三」これに本尊根本印を加えて十八契印となす。つまり、「十八契印」所説の十七印明に本尊根本印を加えて十八道とするのである。

## 二

現在、中院流をはじめ、廣沢諸流の多くは十八道の次第に、大師御作とされる「十八道念誦次第」を用い、又、小野諸流に於ては、淳祐の「聖如意輪念誦次第」並びに元果の「聖如意輪觀自在菩薩念誦次第」を多く用いている様である。そこで十八道立次第の本拠とみられる「十八契印」・「觀自在菩薩如意輪儀軌」・「無量壽如來修觀行供養儀軌」

に御作次第を対照し、さらに五悔等を付加したと云われる寛平法皇補撰の「御作十八道念誦次第」又、元果の「聖如意輪觀自在菩薩念誦次第<sup>(17)</sup>」そして、現在、小野流・広沢流で使用されている十八道の数種類の次第を対照して、次第の変遷、問題点を考察してみたいと思う。

①先づ「十八契印」「如意輪軌」「無量壽軌」を対照してみると、「十八契印」では、十七印明のみ説くのに対し、对照表からもわかる様に「如意輪軌」と「無量壽軌」では、本尊加持、加持念誦・解界・撥遣等を説いている。又、この二つの儀軌には、入我我入観や字輪觀の意趣も顯われている。これらから「十八契印」は十八道の要文だけを抜萃したものではないかと考えられる。又「十八契印」「如意輪軌」には、はつきりと道場觀とは出してはいないが、「如意輪軌」には、

行者次應想於壇中八葉大蓮花花。上有妙師子座。座上有七寶樓閣。垂諸瓔珞繪綵幡蓋。寶柱行垂妙天衣。周布香雲普雨雜花奏諸音樂。寶瓶閻伽天妙飲食。摩尼為燈。<sup>(20)</sup>

とあり、又「十八契印」には、

行者次應想。於壇中八葉大蓮華上有獅子座。座上有七寶樓閣。垂諸瓔珞繪綵幡蓋寶柱行列。垂妙天衣周布香雲。

普雨雜花奏諸音樂。寶瓶閻伽天妙飲食摩尼為燈。<sup>(21)</sup>

とあり道場觀の基となる文が見うけられる。しかし、「無量壽軌」には、この様な文をみつける事が出来ない。そのかわり「十八契印」「如意輪軌」にみうけられない如來拳印を説くのである。これを「御作次第」に於て見ると、道場觀の文、並びに如來拳印・両方を説いてるのである。これ等一つを取つても「御作次第」は、「如意輪軌」「無量壽軌」「十八契印」を典拠として編纂されたのではないかと推測する事が出来るのではないだろうか。ちなみに、今回对照表には載せなかつたが、天台の次第には、道場觀に如來拳印を説かずに「十八契印」「如意輪軌」の文を、ほ

そのまま使つてゐる。<sup>(24)</sup>

②次に①で述べた三つの儀軌と「御作次第」とを比較してみると、かなりのものが「御作次第」に付加されてきてゐる事が明白になる。「十八契印」「如意輪軌」には見うけられず「御作次第」に顯われて来たものを列記すると次の様になる。

加持香水・加持供物・表白神分・五悔・発菩提心・三昧耶・五大願・振鈴・献壇供四智讚・散念誦・後供養・廻向・至心廻向

などである。これに対し、「御作次第」では、「如意輪軌」「無量寿軌」に入我我入・字輪觀の意趣が顯われてゐるにとかかわらず、これらを取り除いている。何故この様な編成にしたのであろうか、特に注目すべき点である。

③次に「御作次第」と寛平法皇補撰の「十八道念誦次第」を比較してみる。

この寛平法皇補撰の十八道次第は、さきにも述べた様に「御作次第」に五悔等を付加した次第である。その構成・内容は、ほとんど「御作次第」と同じである。ただ「御作次第」には、五悔とあってもその文を載せていないが、この次第は次の様に五悔の文を挙げて いるのである。

#### 次五悔

歸命十方一切佛

最勝妙法菩提衆

以身口意清淨業

愍懃合掌恭敬礼

帰命頂礼大悲毗盧遮那仏

無始輪廻諸有中

身口意之所生罪

如仏菩薩所懺悔

我今陳懺亦如是

## 十八道の研究

帰命頂礼大悲毗盧遮那仏

我今深発歡喜心 隨喜一切福智聚

諸仏菩薩行願中 金剛三業所生福

縁覚声聞及有情 取集善根盡隨喜

帰命頂礼大悲毗盧遮那仏

一切世燈坐道場 覚眼開敷照三有

中略

我皆勸請令久住 不捨悲願救世間

帰命頂礼大悲毗盧遮那仏

懺悔隨喜勸請福 願我不失菩提心

中略

如金剛幢及普賢 願讚廻向亦如是

帰命頂礼大悲毗盧舍那<sup>(25)</sup>仏

又、表白、神分については、寛平法皇補撰の次第も「御作次第」と同様に

表白。神分。用否任意。金二打。

とあるだけで実際には、表白・神分の文は見うけられない。

④次に「御作次第」と元果の次第を比較してみると、元果の次第は、御作次第に数種の印明觀想を付加したり、配列を変えたりした構成となっている。付加されたものを記すと、

覽字觀・淨地・觀仏・金剛起・祈願・大金剛輪・四明・拍掌・大三昧耶・入我我入・字輪觀・後鉛この様に御作次第より後に作られたと思われる元果の次第は、數種の印明觀想が付加されているのである。又、御作次第にはなかつた表白・神分の文・さらには祈願の文が元果の次第には、詳細に書かれている。これらの事も非常に興味をそそられる。尚、この中、入我我入・字輪觀については、明白ではないがその意趣が「如意輪軌」「無量寿軌」にすでに顯れているにもかかわらず「御作次第」はこれらを排除しているが、元果の次第は、儀軌の説のとくこの二つを加えている。

次に、「御作次第」・元果の次第の本尊をみてみると、「御作次第」の本尊が大日如來であるのに對し、元果の次第は、如意輪觀自在菩薩である。そして、その本尊の誤いによつて結界の尊の誤いもみうけられる。つまり、大日如來を本尊と為す場合に於ては降三世を、如意輪を本尊となす場合には、馬頭明王を以つて結界の尊としている。この結界の尊について「十八契印」「如意輪軌」「無量壽軌」によつてみるとやはり、結界は馬頭明王としている。

⑤それでは、「御作次第」・元果の次第に現在小野流・廣沢流の四度加行で使用されている。十八道次第を比較して見る事とする。

現在、中院流・廣沢流の多くは、十八道次第に「御作次第」を用い、小野流では、淳祐の「聖如意輪念誦次第」（淳祐の次第）元果の「聖如意輪觀自在菩薩念誦次第」（元果の次第）を用いると云うのが通説である。

その中、まず廣沢流では、西院能禪<sup>(27)</sup>方と伝法院<sup>(28)</sup>流の次第と小野流ではあるが、「御作次第」を用いるという立場から中院流の次第を「御作次第」に對照してみると、本尊については、皆、大日如を用うると云う事で一致する。又、結界の尊も降三世明王を用いている事から、「御作次第」と同じである。「御作次第」には、入我我入・字輪觀が欠けているのであるが、やはり他の三つの次第とも、入我我入・字輪觀が欠けている。これらを、元果の次第と小野流の

幸心流<sup>(30)</sup>・隨心院流<sup>(31)</sup>について見ると、本尊・結界は、元果の次第と同じく他の二つの次第とも、如意輪・馬頭明王を用いている。又、入我我入・字輪觀については、元果の次第のごとく小野のこの二流は、入我我入・字輪觀を加えているのである。そして、幸心流の次第は、元果の次第に。隨心院流の次第は、淳祐の次第<sup>(32)</sup>にそれぞれほぼその構成が一致するのである。廣沢流の西院能禪方・伝法院流をならびに中院流の次第は、「御作次第」に表白、神分・祈願の文・後供養の闕伽・後鈴（伝法院流にはない）等を付加した構成となっている。

## 三

以上、対照表より、次第の変遷・問題点等を考察してみた。

これらの次第の対照表をみると、十八道次第は、根本となる儀軌等には、印明が少なく簡素であるのに對し、時代が下るに従つて様々な印明等が付加され複雑な構成になつてゐる事が明瞭になるのである。

特に、表白神分・祈願などは、元果の次第などからみるに、平安末期より付加されて來た様に思えるのである。しかし、十八道次第は、「密教大辭典」に依れば十九種を、梅尾博士の「秘密事相の研究」に依れば二十一種の十八道次第を解説しているし、更に又、現在流派に依つて口伝必ずしも同一でない事から、これらを詳細に調査研究しなければ、確固たる結論は出ない。しかし、思うにまず本尊に供養し更に、本尊と行者の融合という発想から次第は始まり、他者の為に行者が本尊に祈るという発想の転換に至つて様々なものが付加されて來た様に思えるのである。

つまり、安産・延命・調伏といふ様な平安末期より盛んに行なわれたといふ祈願の発想が正しくそれではないかと思われる。しかし、それらは、現段階では、あくまで想像の域を出ないのである。これらを解決するには、数々の写本等の次第を詳細に比較対照する事が必要と思われる。その中には、勿論東密ばかりではなく、今回対照表には載せ

なかつたが台密の次第との比較対照も成されなければならないと思う。更に尤重要と思われる事は、古代とは、中世とは、どの様な時代であったかと云う事を合わせて考えていかなければならぬと云う事である。これらを考察する事により十八道次第の変遷は、より明白になる事と思うが、これらの事は、今後の研究課題とし、今回は、若干の問題点等を列記し、十八道次第の変遷を述べた次第である。

## 註

- (1) 大正藏十八卷 七八一
- (2) " 七九卷 七一・c
- (3) " 二十卷 二〇六
- (4) " 二十卷 二〇三
- (5) " 十九卷 六七
- (6) 古来より、「十八契印」の作者等、異論があるが、梅尾祥雲博士の「秘密事相の研究」又、高井觀海博士の「十八道の研究」(智山学報・新九巻)等の説にしたがつた。
- (7) 弘法大師全集七卷 九九
- (8) " 七卷 八十七
- (9) " 七卷 九十九
- (10) " 七卷 九十九
- (11) 「興教大師全集」(加持世界社版五六九一五七〇)
- (12) 「十八契印義釈生起」は、一説には、五大院安然の作とも又、一説には、小嶋真興の作ともいふが、東密では古来洛東清水寺定深の作と伝えてゐる。
- (13) 大正藏七十八卷 一一五・c
- (14) 弘法大師全集七卷 七十九
- (15) " 七卷 八十一
- (16) 大正藏七九卷 七一・b
- (17) 日本大藏經 八五・三一九
- (18) 国訳密教・事相卷二
- (19) 西院能禪方次第では、祈願とは出さず、三力に属した様な形式になつてゐるが、その文は、他の次第の祈願の文とほぼ同一であるため、祈願として表には載せた。
- (20) 大正藏二十卷 二〇五・a
- (21) " 十八卷 七八二・c
- (22) 高井觀海博士は、「十八道の研究」(智山学報・新九巻)の次第の対照表に、「十八契印」「如意輪軌」に道場観を掲載していないが、当論文の対照表では、道場観の基となる文が両儀軌にあると思えた為、カッコして掲載した。
- (23) 「十八道行法解説」武、覚円編による。
- (24) この道場観は、「十八契印」「如意輪軌」の楼閣を観じる

部分に加えて蓮華、種子、本尊と觀する構成をとつてゐる。

- (25) 日本大藏經八五卷 三二〇  
(26) " 八五卷 三二〇  
(27) 東寺發行、西院能禪方十八道念誦次第監修 鶩尾隆輝、  
編者 加藤有雄  
(28) 真言宗豊山派宗務所發行、伝法院流十八道念誦次第、編  
纂者 小野塚与澄
- (29) 総本山智積院發行、幸心流十八道念誦次第、編集、發行  
別所弘因  
(30) 大本山隨心院發行、隨心院流「聖如意輪觀自在菩薩念誦  
次第、監修 川井昌雄、編者 市橋真明  
(31) 次第、監修 川井昌雄、編者 市橋真明  
(32) 淳祐の「聖如意輪念誦次第」は、対照表の中の淳祐の次  
第を参考した。



十八道の研究

地 界																護 身
地 界																被甲護身
地 界																護身三昧部
地 界																護
地 界																身
地 界																被甲護身
地 界																被
二 結 界	三部被甲	普供養三力	五大願	發	三昧耶	發菩提心	五悔	神分 〔任意〕	表白 〔用否〕						加持供物	加持香水
	三部被甲	普供養三力	五大願	願	發	三昧耶	發菩提心	五悔	神分 〔任意〕	表白 〔用否〕					加持供物	加持香水
金 剛 概	大金剛輪	普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	祈	神 分	普	金剛	觀	淨	覽字	加持香水
金 剛 概	大金剛輪	普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	表	禮	佛	地	覽字	加持供物
金 剛 概	大金剛輪	普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	普	金剛	觀	淨	加持供物
地 界		普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	禮	佛	地	覽字	加持供物
地 界		普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	表			觀字	加持供物
地 界		普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	表			觀字	加持供物
地 界		普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	表			觀字	加持供物
地 界		普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	表			觀字	加持供物
地 界		普供養三力	五大願	願	發	三昧耶戒	發菩提心	五悔	願	神 分	白	表			觀字	加持供物



十八道の研究

經 行 經行印仏	出道場			被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	關 伽		發 願	普 供 養				
	出道場	禮 仏		被 甲 護 身	三 部	奉 送	解 界	關 伽		祈 願	普 供 養				
	出堂	禮 仏		被 甲 護 身	三 部	發 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		
	出堂	禮 仏		被 甲 護 身	三 部	發 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		
印仏說經	出堂	普 禮		被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		
印仏說經	出堂	普 禮		被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	小 祈 願	普 供 養三力	讀		
誦經印仏	出堂	普 禮		被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		
	出堂	禮 仏		被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		
	出堂	禮 仏		被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		
	出堂	普 禮		被 甲 護 身	三 部	撥 遣	解 界	至心 廻向	廻 向	禮 仏	普 供 養三力		讀		